

## そして、それから…(?) : 王女の物語

難波 美和子

### 1 はじめに

昔話の比較研究では、よく似た話が様々な地域の異なった言語で伝承されていることに会う。どこでも人間は同じ事を考えるのだろうか。どのようにして、誰が伝えたのか、どこが発祥地なのか。複雑な物語の詳細な部分まで似ている話が離れた地域で伝承されているのは、異なった社会でもその話が語り手と聞き手にとって魅力だったからだろう。その話が、地域社会の慣習に反しているように見えることもある。展開は同じ話のように思えるのに、語り方の違いで、異なった印象を受けることもある。

昔話の女性主人公というと、若く美しく従順なシンデレラや白雪姫をまず思い浮かべる人が多いだろう。日本の話ならば、瓜子姫だろうか<sup>1</sup>。しかし昔話では実際には、さまざまな年代の女性が主人公として語られているし、幸福な結婚が女性の人生のゴールとは限らない話が多い。むしろ、女性主人公の物語では、結婚が始まりである。昔話は結婚後の女性たちが直面する様々な問題も扱うのである<sup>2</sup>。

インドの昔話を考えると、「女性中心の説話」では、「結婚は物語の終わりではなく、始まりである」<sup>3</sup> (p.36)。それは「男性を助け、救い、元気を取り戻させ、しばしば彼のために謎を解いたりすることは女主人公の人生のなすべき役割になっている」(p.35)とされるからだ。昔話が伝統的な立場から女性にそのような役割を課していることは間違いないが、男性の援助者という求められる役割を全うする物語の中で、彼女たちが嬉々として逸脱した行動を取ることに注目したい。家を飛び出し、男装し、敵を滅ぼすのである。

「男装の王女」という魅力的な題名に出会ったのは、私がインドの昔話を研究し始めた頃のことだ。「北インドの昔話」の中の一話だった<sup>4</sup>。この物語の王女の誇り高い言葉と颯爽とした活躍が印象に残った。しかし、語り手の資質による特異な物語と思えた。ところがすぐに類例に出会ったのである。19世紀末に採集さ

れたカシミール地方の昔話集<sup>5</sup>だった。同じ昔話集に類例が更に三話掲載されていた。そこでカシミール地方やウッタラプラデーシュ州以外の例を探すと、パンジャブ地方やインド中央部、更にスリランカからも伝承例が報告され、南アジアの昔話タイプインデックス<sup>6</sup>では、881Aの分類されていた。つまり、特別な事例ではなかったのである。しかし当時は異類婚姻譚に関心があつたため、このような物語を伝えた人々の意識について特に考察することはなかった。

この話型はペルシア（イラン）にも類例があり、書承としては『千夜一夜物語』にも含まれている。以前の国際版タイプインデックス<sup>7</sup>では881という話型が西アジアからヨーロッパに、その異型としての881Aは南アジアに分布するとみなされていたが、新しいタイプインデックス<sup>8</sup>では、881Aにヨーロッパの類話も挙げられている。このため881よりも881Aがより広がりをもつように見える。しかし、南アジア地域のいくつかの881Aの物語を比較してみると、それぞれが話型としての共通性を持つとともに、二つに分類される可能性が見出される。その異質性を引き起こすモチーフの違いは、語り手の関心の相違にあると考えられる。その相違こそが881と881Aの違いと捉えるならば、現在881Aに分類されている物語はほとんどが881とみなすことができる。その相違とは、女性の行動に何を求めるかという点で、もともと男性の観点からの物語か、女性の観点からの物語かという点ではなかつただろうか。

## 2 王女の物語

### ○「男装の王女」

結婚した友人たちが夫やその家族との関係に苦労しているのを聞いて、王女は「あたしは結婚したら、嫁ぎ先のみんがあたしを敬わなければいけないようにふるまうわ」と言う。それを偶然立ち聞きしたある王子が、敬われなければ王女がどうするのかに興味を覚え、求婚した。

結婚式が終わると王子は王女を森の中の一軒家に閉じ込めてしまう。その理由が自分の言葉にあると知った王女は実父母の助けで家を抜け出し、男装すると、ラタン・スィンプ（美丈夫の獅子）と名乗って義父の王に仕えた。夜毎、人を食い殺す虎を殺して王に気に入られていたが、他の国に攻められ、敗れて王や王子も捕らえられてしまった。

王女は実父の助けを得ると、ラタン・スィンプとして援軍を率いて戦い、王国を取り戻した。その後ラタン・スィンプは王の下を去り、森の中の家に帰ると王女の姿に戻った。王女が跡を追ってきた王や王子に自分こそがラタン・スィンプだと明かすと、皆は彼女が自分の言葉を実現したことを認め、許しを請うて宮殿に迎えた。

この物語の中で、男装した王女は男性としての役割を完全に果たしている。その能力は彼女の夫を凌駕する。夫の国を取り戻すのも、妻として夫を助けるためというよりも、彼女自身の言葉を実現するためである。この王女はいわゆる女性らしさを物語の中では示していない。従順や控えめといった言葉は彼女には当てはまらない。ちなみに美しいという描写はない。彼女に女性としての尊敬をもたらすのが、男性としての功績であることは、女性の行為が評価されないということも示している。しかしこの王女にとって男性の行為を行うことは、彼女の力を示すことである。

カシミール地方の「王女の物語」では、王女のこのような願望は語られていない。その異型として挙げられた物語では、主人公の王女は婚家で慣習が「息子の妻」という立場の女性に要求するへりくだった態度ゆえに高く評価されている。しかし、この王女もまた必要とあれば人食い鬼を退治する。

#### ○王女の物語

王が戦いに破れ、王・王妃・王子・王子の妃が城を逃れる。王子の妃<sup>9</sup>だけが機転を利かせルビーを持ち出した。そのルビーを王が売りに行くが、商人にだまされ、地下室に閉じ込められてしまった。王子・王妃も同じく閉じ込められてしまう。王女は男装して三人を探しに行き、悪い商人から三人を自由にするが、彼女は商人のもてなしを受けたあと、一人で旅立つ。一方自由になった三人は、王女がいなくなったことを嘆いていた。

王女は男性としてある商人に雇われて、信用された。その上、人食い鬼を倒して商人の子を救ったため、その妹と結婚して財産をもらう。王女は“妻”とともに三人を探しに出発し、再会すると“妻”を王子と結婚させた。そして商人から分けられた財産で兵士を雇い、義父の王国を取り戻した。

王女が三人を助け出した後、彼らと行動をともにしない理由は不明である。自由に動き回るために男装を続けるように見える。彼女もまた、男装した時には男性主人公がするような冒険をする。彼女たちは自分の目的を達成する活動のために男装すると考えてよい。男女の違いは彼女たちには衣服のようなものなのだ。

一方、同じカシミール地方の「王女はいかにして夫を見つけたか」は南アジアのタイプインデックスにおける881Aの典型話とみなせる。この物語には上の「男装の王女」と「王女の物語」にはないモチーフがあり、それが先の二つの物語とは別のものになっている。

○王女はいかにして夫を見つけたか

王は王子の妃にまったく対等な地位、同じ美貌を求める。ぴったりの王女が見つかり、婚約するが、結婚式直前に王子の父が亡くなり、王女の父は破談にした。しかし王女は王子との約束を守るために、王子と駆け落ちする。

途中、王子が王女の宝石を取りに行っている間に、王女は泥棒に攫われ、眠っていた従者は取り残されてしまった。王女は泥棒の手を逃れるが、今度は逃げ込んだ家の金細工師に言い寄られる。今度はその手を逃れて貧しい夫婦に助けられた。王女とはぐれた王子、従者、泥棒、金細工師は行者となって各地を放浪した。

王女は男装して旅をし、ある街で新王を選ぶ儀式に出くわし、王に選ばれた。王となった王女は女性としての自分の肖像を描かせ、公共の場に掲げ、絵に変わった態度を取った者を連行させる。まず泥棒がやってきて処刑され、従者は軍の指揮官に任ぜられる。金細工師が現れて処刑され、王女を助けた貧しい夫婦は厚遇された。最後に王子がやってきた。まず王女は彼を大臣に任命するが、事実を明かして王子を王とし、自分はその妃になった。

王子とはぐれた王女が男性からの性的な脅威を受けるというモチーフは「男装の王女」や「王女の物語」にはない。先に説明したように、これらの物語では、王女の男装は自分の能力を発揮するためのものである。彼女たちには女性戦士のイメージも垣間見える。しかし、「王女はいかにして夫を見つけたか」では、男装は一人で旅をする女性が直面する貞操の危機を回避するためのものである。貞節という「女性らしさ」の表現だといえる。したがって、彼女が男性と同様の活躍を見せる場面は語られない。王に選ばれるのは彼女の功績のためではなく、偶然である。この違いは女性主人公のあり方に対する語り手の関心の所在の差にあると考えられる。

### 3 王子と王女、またはアリ・シャーとズムルード

先に触れたように、『千夜一夜物語』<sup>10</sup>の中にも881とみなされる物語が含まれている。テキストによっても異なるが、バートン版では308夜から327夜<sup>11</sup>にかけて語られる「アリ・シャーとズムルードの物語」である。

○アリ・シャーとズムルード

ホラサン<sup>12</sup>の商人の息子アリ・シャーは父の死後、放蕩で全財産を失う。ある日、美しい奴隷ズムルードが売られるのを見ていると、ズムルードは買い手をことごとく断り、自分の金をアリ・シャーに渡して自分を買わせた。二人はズムルードが作る美しいカーテンを売って生計を立てた。よそ者の商人（実はズムルードに買うことを断られた商人の弟）がアリ・シャーを眠らせ、その間にズム

ルードを攫い、自分の家に閉じ込めた。

隣人の老女の助けでズムルードの居場所を知ったアリ・シャーは逃亡の手配をするが、肝心の時刻に眠ってしまい、その間に盗賊がズムルードを洞窟に連れ込む。ズムルードは盗賊の不在中に男装して逃げ出した。遠い町まで行ったところで、王を選ぶ儀式に行き合わせ、王に選ばれた。

王（ズムルード）は月の一日にすべての人に食事を振舞うことにする。そこに現れた、ズムルードを攫った商人、その兄、盗賊を次々と処刑する。最後に現れたアリ・シャーを宮殿に向かえ、誘惑したあと、正体を明かす。二人は財宝をもって故郷に帰る。

女性主人公が奴隷であることがこれまでの物語の主人公が王女であることと異なっている。口承ではこの物語群の女性主人公は王女やそれに類する地位にある。ズムルードが奴隷であるのは『千夜一夜物語』の特徴であろう。もっとも彼女は自分自身を買うだけの財力を持っている。その財産も含めて、彼女はすべてをアリ・シャーにささげるのである。彼女の能力は適切な詩句を引用することと、美しいカーテンを作ることである。彼女が男装するのは性的な危機を避けるためであり、武勇を示すことはない。最後に「男性として」アリ・シャーを誘惑する。その場面でアリ・シャーが不安に駆られる様子は、誘惑に対するズムルードの態度と対照的であり、真実の暴露へ向かって繰り返される性的な身振りはこの物語を笑話風に行っている。行動においてすべてズムルードが主導権を握っているように見えても、女性からの性的な誘いも含めて、物語はアリ・シャーの願望を中心に展開している。性的な笑いの要素はともかくも、ズムルードが「王女はいかにして夫をみつけたか」の主人公と同じ道筋を辿っていることは明らかである。夫と敵対者を発見の手段の相違は、他の物語で行われる肖像を用いた方法が『千夜一夜物語』の成立に関わった文学サークルの宗教的な立場に抵触するためだろう。

面白いことに、セイロン（スリランカ）の物語<sup>13</sup>がカシミール地方の物語よりも、ある部分でこの「アリ・シャーとズムルード」に良く似ている。主人公は幼馴染の王子と王女、または王女とそのいとこであるが、二人で暮らす際に、彼らが生計を立てる方法は王女が縫う上着、または編むショールなのである。二人を引き離すのが女性のかつての求婚者であるという点も類似しているといえる。このような細部の類似は直接的な影響も想像させる。セイロンはアラブの海洋交易圏である。ただし、夫を発見する方法は肖像の利用であり、更に男装した女性がその性別を疑われるというモチーフが加わっていることなどから、『千夜一夜物語』の「アリ・シャーとズムルード」が直接に伝わったとは考えにくい。『千夜

一夜物語』以前に口承の広がりがあり、陸路・海路を通じて広がって行ったのだろう。

物語の発祥地を限定することはこれらの資料からはできない。昔話では舞台を必ずしも規定しないし、たとえ具体的な地名が挙がっていても、それが発祥地とはいえない。単に伝承地にとっての物語的なイメージの土地であることが多いからだ。ただ、「アリ・シャーとズムルード」では始まりの舞台をホラサンとしており、口承の類例のうちペルシアの例<sup>14</sup>だけは主人公の住まいをホラサンと述べている。これに対して、ゲルハルトはこの物語をエジプトの恋物語の一つから派生したもの、とみなしている<sup>15</sup>。

#### 4 「男装する王女」を語るのはだれか

国際版タイプインデックスは881を次のように説明している。

ある男が高い地位の女性と結婚する。妻が夫の不在中に誘惑され、妻の不貞を誤認した夫が妻を殴る。妻を殺したと思った夫が逃げた間に、妻を手当てした医者が彼女に求婚する。逃げ出した妻は男装して旅をし、ある国の王に選ばれる。王は女としての自分の肖像を公開し、それによって敵対者と夫とを見つけ出す。

妻の貞節が始まりのモチーフになっており、それを受けて「何度も証明される貞節」という話型名が与えられている。分類者にとって、この話型の中心モチーフは妻が夫に貞節を疑われること、しかも何度も性的な脅威にさらされ、それから逃れるための男装することである。そして男装を終わらせるものが夫の登場であり、彼女は夫に自分が手に入れた王国を差し出すのだ。

これまで見たように、南アジアの物語では、夫が妻の貞節を疑うことから始まるのではなく、偶然二人が別れ別れになることに始まっている。タイプインデックスは始まりのモチーフを重視する傾向があるため、この違いによって類似する異話型とみなし、881から区別した881A「捨てられた花嫁が男装する」が作られたのだと推測される。しかし、この冒頭の部分はそれほど重要だろうか。夫の不在時に女性主人公が性的な危機に何度か見舞われ、それから逃れて男装し、その結果王に選ばれるという展開はいずれも同じである。夫を探し出す方法も自分の肖像（絵または彫像）である。テーマはやはり女性の試練にさらされる貞節にある。「王女はいかにして夫を見つけたか」は881として分類して不都合はないように思える。だが、「男装の王女」「王女の物語」を881「何度も証明さ

れる貞節」には分類しにくい。881に変異型があることを認めるならば、「王女がはぐれた夫を探すために男装し、王国を取り戻す、または手に入れた王国を夫に与える」とし、その中に女性主人公の男装の動機として性的な脅威から身を守るものは含まないと考えてはどうだろうか。

881は女性の夫に対する忠実さを物語のテーマにしている。男装の目的は夫以外の男性の目を逃れることにある。一方881Aのテーマは女性が自分の地位を取り戻すために、男装して冒険をすることである。「男装の王女」のように直接に語られてはいないが、女性主人公の力を示し家族の中での地位を獲得することが大切なのだ。救助の対象が夫だけではなく、夫の両親が含まれていることもそれを示しているだろう。

話型は物語に先んじてあるものではなく、多くの伝承された物語のおおまかな共通点を捉えて、比較するための指標としたものであるから、厳密な定義を行うことに意味はない。しかし、類話型の場合、どのような性格の違いをもって話型Xといい、XのバリエーションのX-Aであるというのかには多少厳密さが必要だろう。881と881Aとを女性に要求される貞節のモチーフの有無とすることは語りの意味からも有効ではないだろうか。

カシミール地方のもう一つの男装する王女の物語、「羊にされた王子」<sup>16</sup>では、男装する前の王女が盗賊や魔物に出会っても、彼女自身が退治してしまっただけに性的な脅威というモチーフは意味を喪失している。貞節をテーマとする物語と女性の冒険の物語との中間的な様相を示しているとも考えられる。女性が男性からの誘惑を潜り抜けて、夫への貞節を守り、王国など価値あるものを夫に差し出すことが881の語り手にとって関心のあるものならば、同じような物語だが、その異型は、女性が自由に振舞い冒険することに関心がある。このような関心を示したのは女性たちではないだろうか<sup>17</sup>。貞節と奉仕の物語の枠の中で、男性ができることは何でもできるのだ、と頷いたり、結婚生活において家族から尊敬されること、誇りが必要だと語る。物語は時に、ひそかな抵抗であったかもしれないが、それを享受しても後ろめたくはなかつただろう。どんなに逸脱しても、最後に手に入れたものを夫に差し出すことで、妻として夫を助けるという道徳的要求は満たされるのだから、彼女たちはそれを大いに楽しんだに違いない。



## 注

- 1 日本の「シンデレラ」物語には「姥皮」と呼ばれる話があるし、継子いじめの話には「米福栗福」などがあるが、代表的な昔話とは言い難い。むしろ鶴女房や蛇女房という異類の女性の物語や、書承説話との影響が顕著な「かぐや姫」のほうが日本の女性主人公の話としては一般的なようだ。
- 2 「眠りの森の美女」は結婚で終わるものがよく知られているが、17世紀のペローの版では女性主人公は結婚後に人食い鬼の義母の脅威という難問を克服しなければならない。また「ガチョウ番の娘」のように、嫁ぎ先で偽の花嫁に地位を奪われる物語もある。
- 3 ラーマヌジャン、A.K., 「序論」『インドの民話』中島健（訳）、1995年、青土社、Ramanujan, A. K., Introduction in *Folktales from India*, 1991, New York
- 4 坂田貞二(編訳)「北インドの昔話」(坂田貞二・前田式子(編訳)『インドの昔話(上)』、1983年、春秋社)
- 5 Knowles, H., *Folk-Tales from Kashmir*, 1893. London. (re-print 1985.)
- 6 Thompson, S. and W. E. Roberts, *Types of Indic Oral Tales*, 1960, Helsinki, (FFC 180).
- 7 Aarne, A. and S. Thomson, *The Types of the Folktale*, 1964, Helsinki, (FFC 184).
- 8 Uther, H.-J., *The Types of International Folktales*, 2004. (FFC284).
- 9 王子の妃も英語では princess である。「王子の妃」は特に意味がない限り、王女と言うことにする。
- 10 アラビア語で 'Alf Layla wa Laylah' (千の夜と (一つの) 夜)
- 11 Burton, R. F., *The Book of the Thousand Nights and a Night*, vol.IV. 1888, London, pp.187-228. ちなみにマルドリユスによるフランス語訳からの英訳版 (from French translation of Dr. J.C. Mardryus, English translation by Powys Mathers, *The Book of the Thousand Nights and One Night*, Vol.II. London, 1964. pp.235-270) では、316夜から331夜である。
- 12 イラン北部の地方名。
- 13 'The Prince and the Princess', and 'A Princess and a Prince', from Parker, *Village Folk-tales of Ceylon*, vol1-3., 1910-1914.
- 14 Die Getrennten Geliebten, in Christensen, Arthur, *Persische Märchen*, 1958. Duesseldorf, pp.121-132.
- 15 Gerhardt, M.I., *The Art of Story-Telling; A Literary Study of the Thousand and one Nights*, Leiden, 1963. pp.141-142. The Arabian Nights Encyclopedia (Santa Barbara, 2004) にもこの見解がそのまま引用されていることから、特に反論は行われていないらしい。
- 16 Knowles, 1893. pp.65-74. The Prince who was changed into a ram.
- 17 語り手が女性であると確認できるのは「男装の王女」だけである。採集者の坂田貞二氏は語り手がこの話を実に生き生きと語ったと述べている。「王女の物語」「羊にされた王子」は同一話者であるが、性別は分からない。名前 (Siva Bayu) からすると男性ではないかと思う。「王女はいかにして夫を見つけたか」の話者はおそらく男性。セイロンの二つの物語の話者もおそらく男性である。『千夜一夜物語』が男性の文化サークルの中で文字化されたことはほぼ確実である。